平成 27 年度
横須賀美術館　運営評価報告書

平成 28 年（2016 年）８月

横須賀市教育委員会

美術館運営課

目　次

1　平成 27 年度　横須賀美術館の運営評価について ---------- 1

2　平成 27 年度の運営評価システム ---------- 3

3　平成 27 年度の運営評価結果 ---------- 6

① 広く認知され、多くの人にとって横須賀市を訪れる契機となる。 --- 7

② 市民に親しまれ、市民の交流、活動の拠点となる。 ---------- 13

③ 調査研究の成果を活かし、利用者の知的欲求を満たす。 ---------- 17

④ 学校と連携し、子どもたちへの美術館教育を推進する。 ---------- 24

⑤ 所蔵作品を充実させ、適切に管理する。 ---------- 28

⑥ 利用者にとって心地よい空間、サービスを提供する。 ---------- 31

⑦ すべての人にとって利用しやすい環境を整える。 ---------- 35

⑧ 事業の質を担保しながら、経営的な視点をもって、効率的に
運営・管理する。 ---------- 38

4　横須賀美術館運営評価委員会　委員名簿 ---------- 41

5　横須賀美術館運営評価委員会条例 ---------- 42

はじめに

横須賀美術館の美術館評価委員会は、開館前の平成19年3月に発足しました。それから3年間ほど評価システムの構築に関して議論を重ね、点検評価の初年度版になります平成21年度の活動の評価を行いました。その後も毎年度評価活動を行いつつ自己点検・自己評価における課題や改善点の検討を繰り返し、横須賀美術館独自の評価システムとして運用し、このたび平成27年度の評価を行いました。

平成27年度の評価は、前年の平成26年度のシステムと同様、3つの使命に基づく7つの目標と、経営的視点による目標を加えた計8つの目標について評価しました。評価結果を昨年度と比較してみますと、全体的には評価を上げたものの、依然として改善が見られない項目、達成目標に至らず評価を下げた項目、また、評価の高い項目であっても、今後の課題として各所に改善を検討すべき点が見受けられました。

年を追うごとに評価が上がってきており、評価システムのPDCAサイクルが正しく機能し、それが成果につながっているものと感じています。

評価システムは、日常的に行われている美術館活動を点検評価し、課題の改善や解決につなげるツールとして活用するものです。このツールを最大限活用し、良い評価を得た活動は現状の継続維持と更なる改善に努め、課題については解決へ取り組んでいくことで、市民に親しまれる美術館として活動を続けてまいります。

平成28年8月

横須賀美術館
館長　大川原日出夫

1　平成 27 年度　横須賀美術館の運営評価について

（1）運営評価の目的

横須賀美術館の運営評価は、現在行っている活動を振り返り、適正に行われているかを自己点検することで課題や反省を自覚し、改善点の検討につなげるものです。

美術館は１年間の活動をまとめ、自らの評価（一次評価）を行います。一次評価を運営評価委員会に報告し、運営評価委員会は活動内容を市民目線でチェックし、二次評価を行います。併せて、美術館の業務改善、よりよい活動につなげていくことを目的として、改善点や活動の提言を行います。

５頁に掲載した図のとおり評価全体の流れは PDCA サイクルによる改善を基本としています。個々の業務を計画(P:Plan)し、実行(D:Do)していき、その内容を評価(C:Check)し、これを改善(A:Action)につなげていきます。

毎年この活動を繰り返していくことで、よりよい横須賀美術館を目指していくものです。

（2）評価項目

横須賀美術館は、その設置条例第１条に「美術を通じたさまざまな交流の機会を促進し、市民の美術に対する理解と親しみを深め、もって文化の向上を図る」と、設置の目的を明記してあります。そしてこの目的に沿った「使命」を掲げ、「使命」に基づいた「目標」を示し、この目標を評価項目として体系づけました。それぞれの目標には、「達成目標」と「実施目標」を掲げ、これが具体的な評価をしていく項目となります。

なお、「達成目標」は数的指標であり、具体的な数値目標が示されるため、達成の成否は客観的に明らかです。評価者は、その他の資料もあわせみたうえで、達成の度合いを判断し、総合的な評価を行います。

いっぽう、「実施目標」は質的指標であり、評価者は、運営者の行動報告に基づいて、主観的評価を行います。

評価項目は、「平成 27 年度評価システム」として３～４頁をご覧ください。

（3）評価基準

達成目標と実施目標共通の基準を設けています。

目標に到達したかを「Ｓ」から「Ｄ」の５段階とし、以下の基準としました。

Ｓ：優れた成果を挙げている
Ａ：目標を達成している
Ｂ：目標をほぼ達成している
Ｃ：目標にはほど遠い。より一層の努力を要する
Ｄ：努力が結果に結びついていない。方法そのものについて再検討を要する

二次評価を評価委員が行う際には、上記のほか、Ｆ：判定不能を設けています。

＊現在の評価項目は、平成 22 年度に見直し、現在に至っています。

【目標の性格】（平成 22 年度から）

「目標」ごとに、「達成目標」と「実施目標」を設けた。

「達成目標」：数的指標
・「目標」の達成度合いを端的にしめす数値目標。
・主に外的要因（来館者の動向など）によって結果が左右される。
・達成したかどうかは客観的に判断される。
（達成した場合のＳ/Ａの別、達成しなかった場合のＢ～Ｄの別は、各委員の裁量の範囲。）

「実施目標」：質的指標
・「目標」を達成するための行動計画。
・運営者側の計画的な行動であり、充分であるかどうかは各委員の主観的な判断による。
・端的な指標に過ぎない「達成目標」のみでは把握できない部分を補う役割がある。

【評価基準】

「達成目標」と「実施目標」に共通の評価基準を適用する。

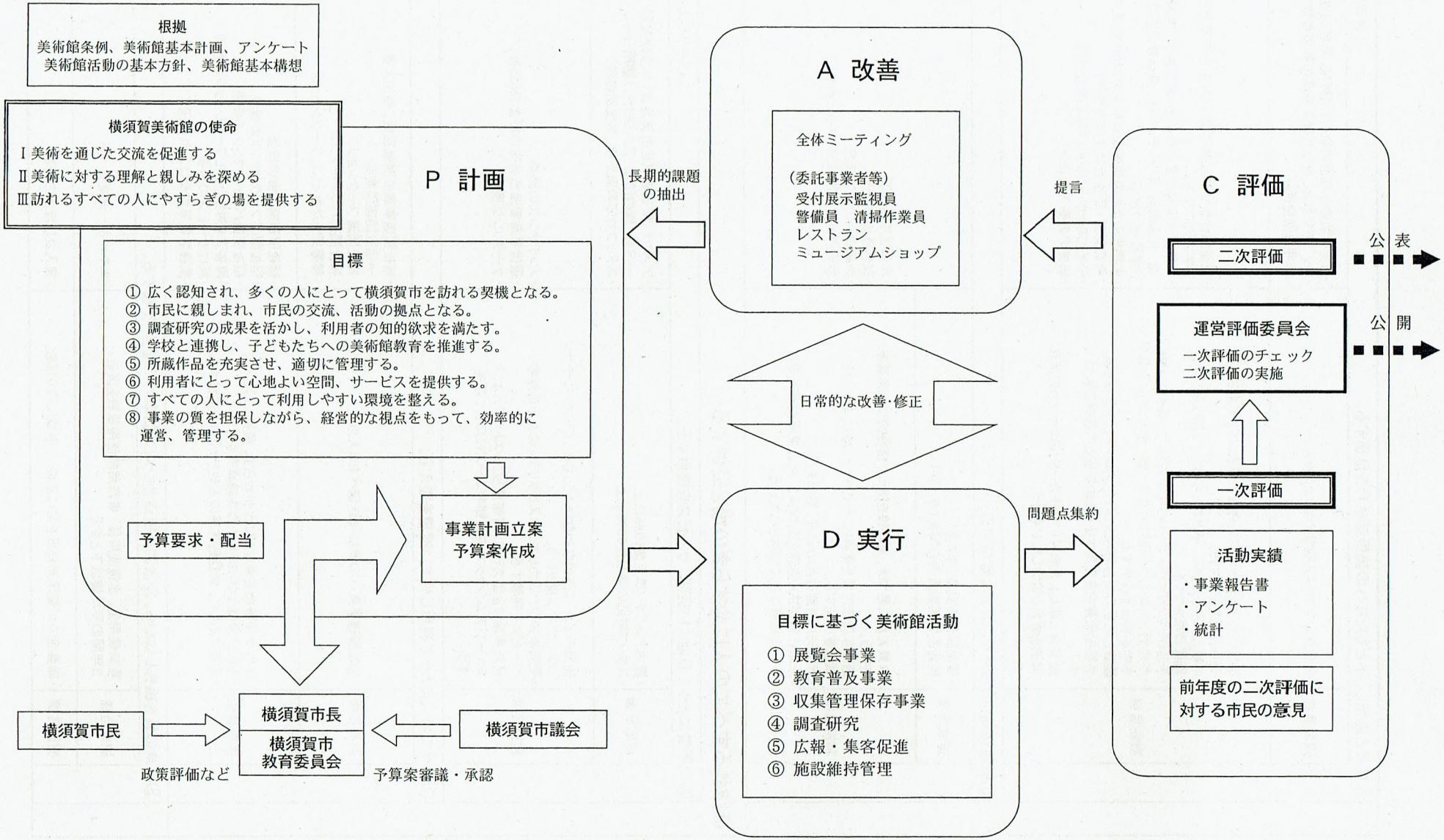
評価基準 （平成 22 年度から）	
すぐれた成果を挙げている。	S
目標を達成している。	A
目標をほぼ達成している。	B
目標にはほど遠い。 より一層の努力を要する。	C
努力が結果に結びついていない。 方法そのものについて再検討を要する。	D

判定不能	F

Ｓ～Ｄの５段階評価に、「Ｆ」（判定不能）を加えた。「Ａ」と「Ｂ」の間に「目標」がある。
・目標を達成していれば「Ａ」以上となり、よい評価であることがわかりやすい。
・目標より下に段階を設けることにより、目標を達成していない場合、その度合いを表現しやすくなった。
・結果が著しく劣っている、あるいは努力の方向が間違っているために、方法そのものの再検討が必要な場合のために、「Ｄ」評価を設けた。
・専門的な知識が必要であるなどの理由から、評価ができないという場合のために「Ｆ」（判定不能）を設けた。

2　平成 27 年度の運営評価システム

使命	目標	指標	参考資料
Ⅰ 美術を通じた交流を促進する			【集客・交流推進】
①広く認知され、多くの人にとって横須賀市を訪れる契機となる。			〔広報〕
	達成目標	・年間観覧者数100,000人以上	・年間観覧者数（年度別推移） ・年間来館者数（年度別推移） ・駐車場利用状況（年度別推移） ・来館回数（年度別推移）　＊リピート率 ・居住地域（年度別推移）　＊市民率 ・交通手段（年度別推移）
	実施目標	・様々な広報媒体の特性を生かして、効果的な広報活動を実施し、交流を促進する。 ・各種イベントを開催し、展覧会以外の要因での利用を増やす。 ・外部連携を推進し、様々な機会と場所を捉えて、美術館の情報を発信する。 ・旅行会社などへの働きかけを通じて、団体集客を促進する。 ・商業撮影の受入と誘致を推進し、美術館のイメージアップを図る。	・各種メディアへの掲載実績 ・訴求活動の概要（ポスター等配布、リリース発送の状況）
②市民に親しまれ、市民の交流、活動の拠点となる。			〔市民協働〕
	達成目標	・市民ボランティア協働事業への参加者数延べ2,000人（事業ごとに加算。登録者・一般参加者を総合して）	・各事業ごとの開催回数、参加者数の一覧 →サポボラ研修 所蔵品展ギャラリートーク（参加者数、参加ボランティア数） 小学校鑑賞会補助（参加ボランティア数のみ） ワークショップ補助（参加ボランティア数のみ） プロジェクトボランティア会議 プロジェクトボランティアイベント（参加者数、参加ボランティア数）
	実施目標	・市民が美術館に親しみを感じ、訪れる機会をつくる。 ・市民ボランティアが、やりがいを持っていきいきと活動できる場を提供する。	・ボランティア関連事業の概要 ・（ボランティアの感想・反応）
Ⅱ 美術に対する理解と親しみを深める			【社会教育】
③調査研究の成果を活かし、利用者の知的欲求を満たす。			〔展覧会・教育普及〕
	達成目標	・企画展の満足度80％以上	・各企画展の満足度 ・所蔵品展の満足度（年度別推移） ・谷内六郎展の満足度（年度別推移）
	実施目標	・幅広い興味に対応するようバランスをとりながら、年間6回（児童生徒造形作品展を含む）の企画展を開催する。 ・所蔵品展・谷内六郎展をそれぞれ年間4回、テーマをもたせた特集を組みながら開催する。 ・知的好奇心を満たし、美術への理解を深める教育普及事業を企画・実施する。 ・所蔵図書資料を充実させる。 ・利用する人が快適に過ごせるよう、図書室の環境を整える。 ・主として所蔵作品・資料に関する調査研究を行い、その成果を美術館活動に還元する。	・各企画展（児童生徒造形作品展を除く）の概要（ねらい、担当者の感想・反省点） ・所蔵品展の概要（同） ・谷内六郎展の概要（同） ・講演会・アーティストトーク等の実施状況（同） ・大人向けワークショップ等の実施状況（同） ・図書室の概要（図書新規購入額・点数、寄贈図書の点数） ・図書室の利用状況（利用者の月別推移、担当者の感想・反省点） ・学芸員による論文、発表等

④学校と連携し、子どもたちへの美術館教育を推進する。			〔若年層への教育普及〕
	達成目標	・中学生以下の年間観覧者数22,000人	・観覧者数の券種別内訳（月別推移、年度別推移） ・子どもを対象とした教育普及事業の参加者数（延べ人数の年度別推移）
	実施目標	・学校における造形教育の発表の場として、児童生徒造形作品展を実施する。 ・学校と緊密に連携し、子どもたちにとって親しみやすい鑑賞の場をつくる。 ・子どもたちとのコミュニケーションを通じて、美術の意味や価値、美術館の役割などに気づき、考え、楽しみながら学ぶ機会を提供する。 ・鑑賞と表現の両方を結びつけたプログラムを実施する。 ・小学校鑑賞会を充実させるため学校との連携を強化する。 鑑賞会と連動した教材「アートカード」のいっそうの活用促進を教員と協力しながら行う。	・児童生徒造形作品展の概要（担当者の感想・反省点）（学校側の反応） ・小学校美術館鑑賞会の概要（実施内容、学校数、児童数、対応職員・ボランティア数、担当者の感想・反省点）（学校側の反応） ・中学生のための美術鑑賞教室の概要（実施内容、担当者の感想・反省点）（生徒の感想） ・子ども向けワークショップ等の実施状況 ・研修等の受入れ状況
⑤所蔵作品を充実させ、適切に管理する。			〔収集管理〕
	達成目標	・環境調査の実施（年2回） ・美術品評価委員会の開催（年1回）	・作品収集の状況 ・保管環境の状況 ・所蔵作品の修復状況 ・所蔵作品の貸出状況（件数、点数）
	実施目標	・収集方針に基づき、主体性を持って積極的な収集活動を行う。 ・適正な保管環境を維持し、そのチェックのため必要な調査を実施する。 ・計画的に所蔵作品の修復、額装を行う。 ・所蔵作品が広く価値を認められ、他の美術館等で開催する企画展などに活用されている。	
Ⅲ訪れるすべての人にやすらぎの場を提供する			【運営・管理】
⑥利用者にとって心地よい空間、サービスを提供する。			〔メンテナンス・来館者サービス〕
	達成目標	・館内アメニティ満足度90％以上 ・スタッフ対応の満足度80％以上	・アメニティ関連各項目の満足度（年度別推移） →全般・館内印象・館内環境・休憩所・トイレ・清掃 ・スタッフ対応の満足度（年度別推移）
	実施目標	・建築のイメージを損なわないよう、じゅうぶんなメンテナンス、館内清掃を行う。 ・受託事業者と協力して、ホスピタリティのある来館者サービスを実践する。 ・受託事業者と協力して、付帯施設（レストランおよびミュージアムショップ）を来館者ニーズに応じて運営する。	・メンテナンスの概要 ・運営事業者連絡会議の概要（議題等） ・ケータリング実績
⑦すべての人にとって利用しやすい環境を整える。			〔バリアフリー〕
	達成目標	・福祉関連事業への参加者数延べ400人以上	・福祉関連事業の開催回数、参加人数 →福祉関連講演会 福祉関連ワークショップ 福祉関連パフォーマンス 障害児を対象としたワークショップ
	実施目標	・年齢や障害の有無などにかかわらず、美術に親しんでもらう（環境づくりの）ための各種事業を行う。 ・必要に応じて、対話鑑賞等の人的サポートを実践する。	・福祉関連講演会の概要 ・福祉関連ワークショップの概要 ・福祉関連パフォーマンスの概要 ・障害児を対象としたワークショップの概要 ・託児サービスの概要 ・養護学校等の受け入れ状況
⑧事業の質を担保しながら、経営的な視点をもって、効率的に運営・管理する。			〔経営的視点〕
	達成目標	・電気使用量、水道使用量、事務用紙使用枚数を直近3年間の平均値以下とする。	・エネルギー消費量一覧
	実施目標	・職員全てが費用対効果を常に意識し、事業に取り組む。	・歳入及び歳出の内訳

横須賀美術館運営評価システムの全体像